

自然主義文学と漱石・鷗外

- ルポルタージュ
- 悲惨小説・深刻小説
- 観念小説



- 家庭小説(明30年代)



- 自然主義(明40年代)



最暗黒の東京



国木田独歩



泉鏡花



彼らの物語

日本近代文学とジェンダー



飯田祐子 著

名古屋大学出版会



文学

語りにくさと読まれること

彼女たちの

飯田祐子
Yuko Iida

名古屋大学出版会

家庭小説と読者の ジェンダー

明治20年代末

健全・道徳・趣味
理念「家庭小説」
女・子供・紳士

明治30年代

『己が罪』
女・子供・紳士

不健全
現在ある小説



己が罪 上巻：富岡永洗 木版口絵



己が罪 中巻：坂田耕雪 木版口絵



己が罪 下巻：武内桂舟 木版口絵

菊池幽芳『己が罪』
1899年(明治32年)

現今読書社会に於ける二個要求は、厳
粛純潔なる家庭に用ゐらるべき趣味あ
る読物、及び児童の心境知識を開発す
べき無害の物語類なるべし(「蕉窓漫
言」『帝国文学』M33.7)

明治20年代末

健全・道徳・趣味
理念「家庭小説」
女・子供・紳士

明治30年代

『己が罪』
女・子供・紳士

不健全
現在ある小説



己が罪 上巻：富岡永洗 木版口絵



己が罪 中巻：坂田耕雪 木版口絵



己が罪 下巻：武内桂舟 木版口絵

一部の中流社会進んでは上流の微々たる一小部分に於て、軟文学を愛好するの士を出し.....従来の小説に比較して、高潔なる悔悟、献身的熱愛を含める (文芸小観 小説の新要求、新声、明34.6)

明治20年代末

健全・道徳・趣味
理念「家庭小説」
女・子供・紳士

明治30年代

『己が罪』
女・子供・紳士

不健全
現在ある小説



己が罪 上巻：富岡永洗 木版口絵



己が罪 中巻：坂田耕雪 木版口絵



己が罪 下巻：武内桂舟 木版口絵

家庭小説と読者のジェンダー

明治40年代

明治20年代末

健全・道徳・趣味
理念「家庭小説」
女・子供・紳士



不健全
現在ある小説

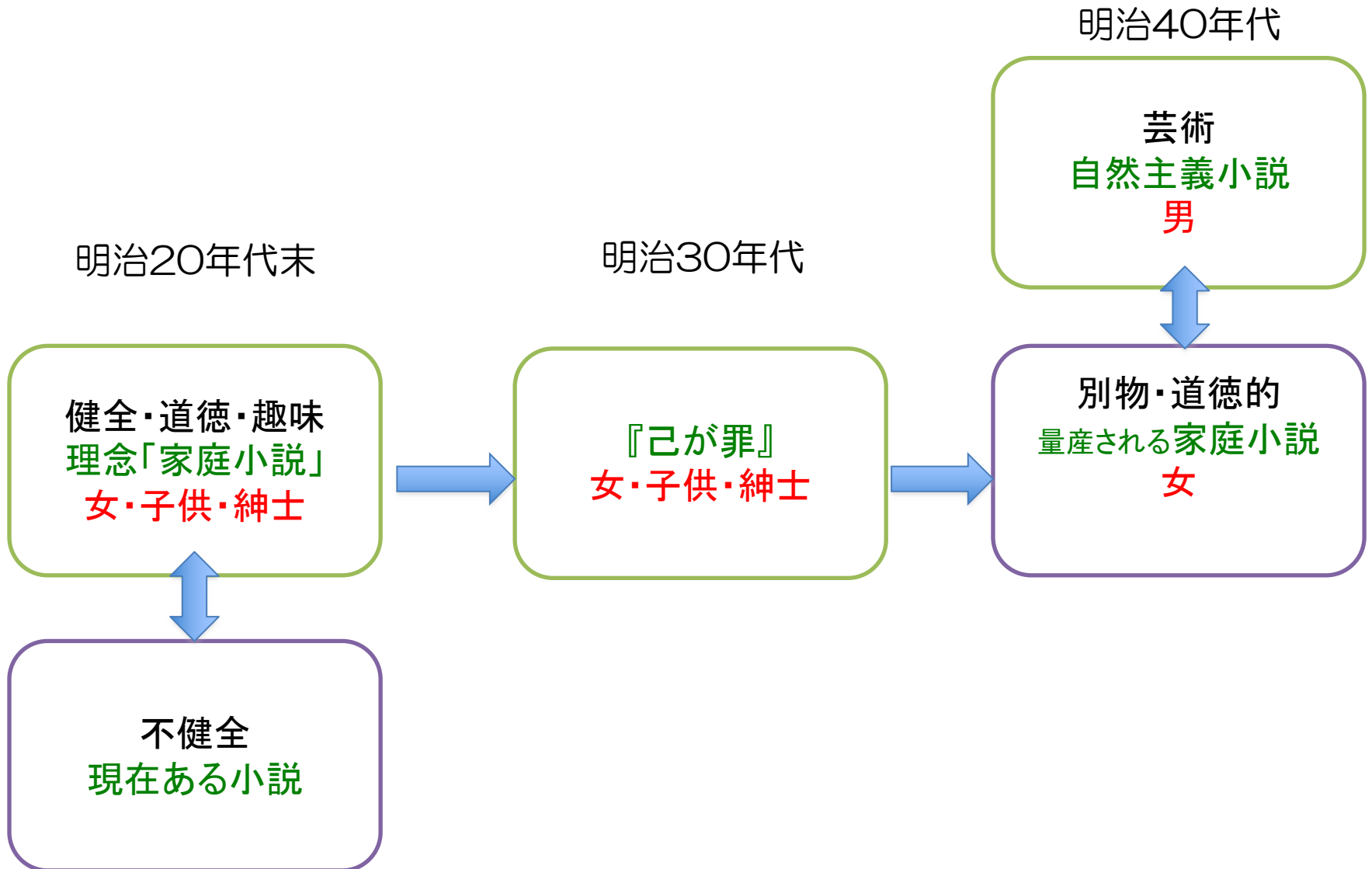
明治30年代

『己が罪』
女・子供・紳士

別物・道徳的
量産される家庭小説
女

今の家庭小説家は自ら文芸の聖壇を下りて、青年子女の前に平身低頭せる意気地無き懦弱漢也(登張竹風「自分評論」『読売新聞』M38.10.29)

家庭小説と読者のジェンダー





島崎藤村『若菜集』春陽堂、1897年

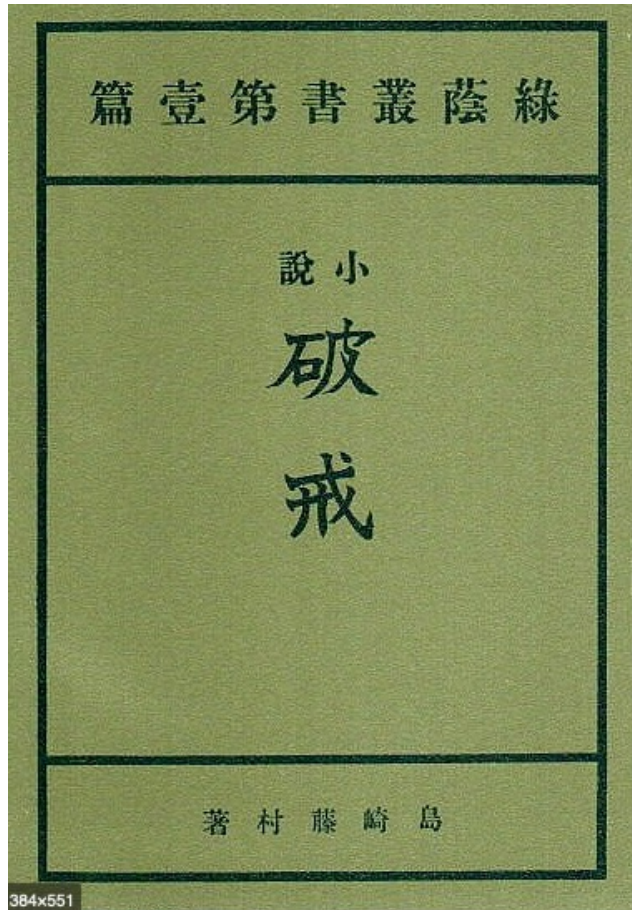
初恋

まだあげ初めし前髪そ まへがみの
 林檎りんごのもとに見えしとき
 前にさしたる花櫛はなぐしの
 花ある君と思ひけり

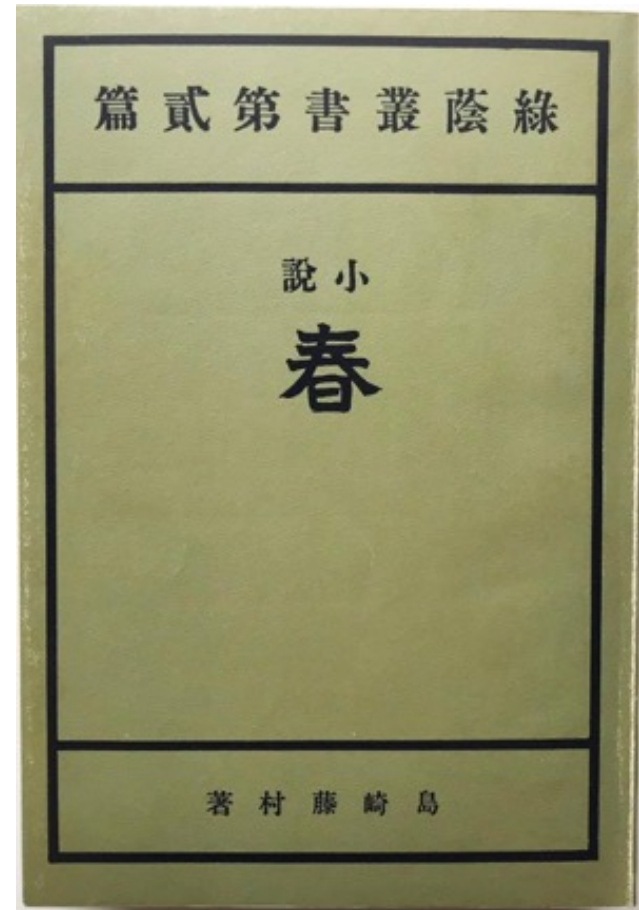
やさしく白き手をのべて
 林檎をわれにあたへしは
 薄うすくれなみ 紅みの秋の実に
 人こひ初めしはじめなり

わがこゝろなきためいきの
 その髪かみの毛にかゝるとき
 たのしき恋こひの盃さかずきを
 君きみが情なさけに酌くみしかな

林檎畑りんごばたけの樹この下に
 おのづからなる細道ほそみちは
 誰たが踏みそめしかたみぞと
 問ひたまふこそこひしけれ



1906(明39).3 自費出版



『東京朝日新聞』1908(明41).4.7-8.19
自費出版

『蒲団』評

- 此の一篇は肉の人、赤裸々の人間の大胆なる懺悔録である。此の一面に於いては、明治に小説あつて以来、早く二葉亭風葉藤村等の諸家に端緒を見んとしたものを、此の作に至つて最も明白に且意識的に露呈した趣がある。(島村抱月『早稲田文学』明40.10)
- その芸術上の出来栄えは暫く措いて問はず、むしろその勇気が実に文学史上の功績である。(近松秋江『早稲田文学』)
- かかる人には此くの如き心理現象があり得るだらうとは思つたが、あつたらしいといふ感じは起らなかつた(太田正雄『明星』明40.10)
- まだまだ自然に描写が出来て居ない、斯う云ふ人間が実際に有り得べきやうにはどうしても受取れない。(与謝野寛『明星』)

自然主義作家たち

徳田秋声



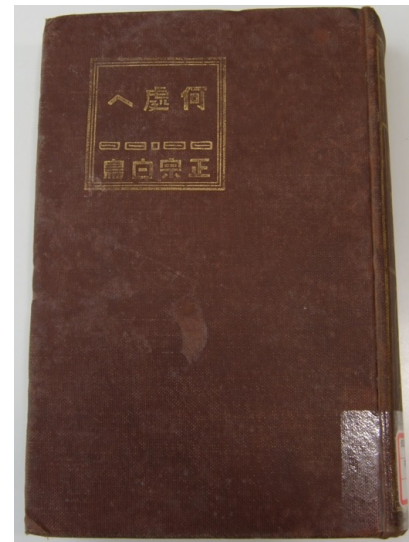
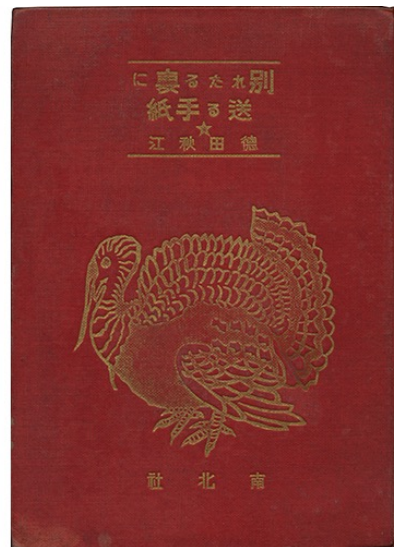
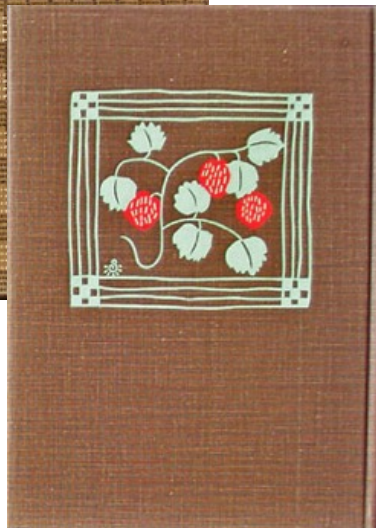
近松秋江



正宗白鳥



岩野泡鳴



文学は男の仕事か？

明治30年代

男の仕事 = 金



文人
= 天職
矜持・劣等感

明治40年代

日本の小説は筋骨逞しき四十以上の男が.....其全力を傾注し命懸けでする仕事たるに足るかどうかと云ふ疑いは.....自然に起らざるを得ない
(坪内逍遙、功名心と日本の小説、趣味、M41.1)

文学は男の仕事か？

明治30年代

男の仕事 = 金



文人
= 天職
矜持・劣等感

明治40年代

男の仕事

小説家
= 職業の一つ (天職
ではない)

自然主義小説

小説家と云ふ者は
ソんな神聖な有難
い商売ぢやない、
油屋が油を売るや
うに、原稿を書いて
売つて衣食する職
業だ (黒衣僧、小説
家の告白、新潮、
M39.11)

「如何にして文壇の人となりし乎」（『新潮』M41.8~42.2）

- 要するに極平凡なもので、文壇の人となるより外仕方なくてなつた……自分の**天分**だとは決して思はない（正宗白鳥）
- 仕方なく、まあ斯うして**づる／＼**と文学者のやうなものになつて了つたのです（徳田秋江）
- 唯、**づる／＼**になつて来たのである（真山青果）
- **優美に見えた女との闘ひよりは、卑しい金の為の闘ひが、遙かに真面目でもあり、男らしい闘である**と自覚した（小山内薫）

「文芸は男子一生の事業とするに足らざる乎」（『新潮』M41.11）

- 如何なる事業も人生に取つて詰らぬ筈はない、**文芸も其一つ**である（小杉天外）
- **単に文芸のみではない**。世の中の総ゆる職業に対して、其疑ひは起こつて来る（島村抱月）
- 兎に角十分推敲して食つて行かれるだけの原稿料を払つて貰ひたい（佐藤紅緑）

文学と男の仕事

明治30年代

男の仕事 = 金



文士
= 天職
矜持・劣等感

明治40年代

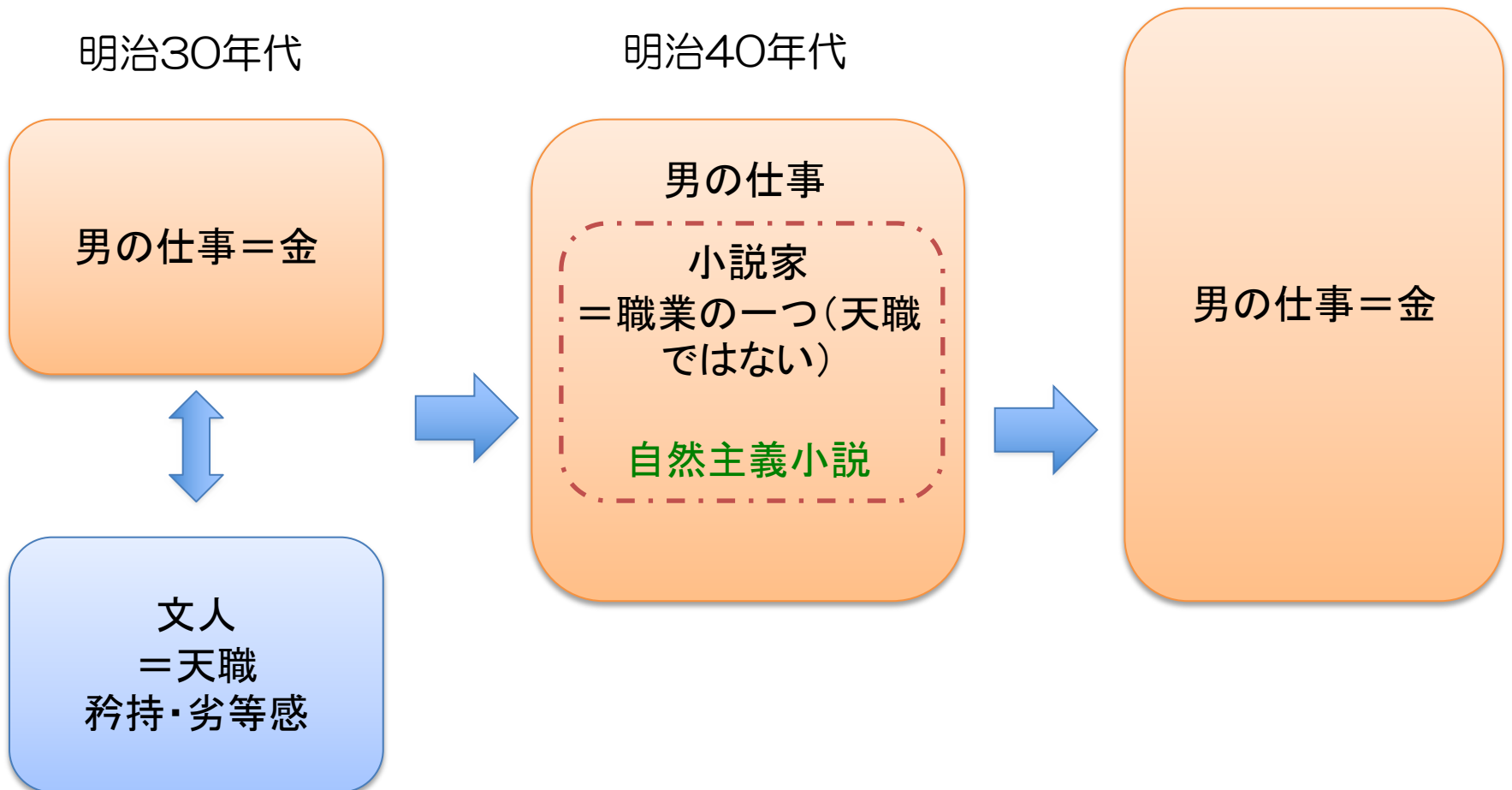
男の仕事

小説家
= 職業の一つ (天職
ではない)

自然主義小説



文学は男の仕事か？



自然主義の時代

- 日露戦後のメディア状況
- 「作家」の商品化
- 告白という制度：写生文→内面の吐露
- 近代小説の文体の確立
- 作品と作家の重なり
- 読者共同体の形成：インサイダー・同質性
- 「文学」のジェンダー化

夏目漱石「田山花袋君に答ふ」 (『国民新聞』M41.11.7)

- 拵へものを苦にせらるゝよりも、生きて居るとしか思へぬ人間や、自然としか思へぬ脚色を拵へる方を苦心したら、どうだらう。拵へた人間が生きてゐるとしか思へなくつて、拵へた脚色が自然としか思へぬならば、拵へた作者は一種のクリエイターである。

写生←→文範主義

文章の面白さにも様々あれども古文雅語などを用ゐて言葉のかぎりを主としたるはこゝに言はず。また作者の理想などたくみに述べて趣向の珍しきを主としたる文もこゝに言はず。こゝに言はんと欲する所は世の中に現れ来りたる事物(天然界にても人間界にても)を写して面白き文章を作る法なり。或る景色又は人事を見て面白しと思ひし時に、**それを文章に直して読者をして己と同様に面白く感ぜしめんとするには、言葉を飾るべからず、誇張を加ふべからず、只ありのまゝに見たるまゝに其事物を模寓するを可とす。**

正岡子規「叙事文」『日本』1900

写生文家の人事に対する態度は貴人が賤者を視るの態度ではない。賢者が愚者を見るの態度でもない。君子が小人を視るの態度でもない。男が女を視、女が男を視るの態度でもない。つまり大人が小供を視るの態度である。両親が児童に対するの態度である。世人はそう思うておるまい。写生文家自身もそう思うておるまい。しかし解剖すればついにここに帰着してしまう。

夏目漱石「写生文」『読売新聞』1907.1.20

漱石の「作者／読者」

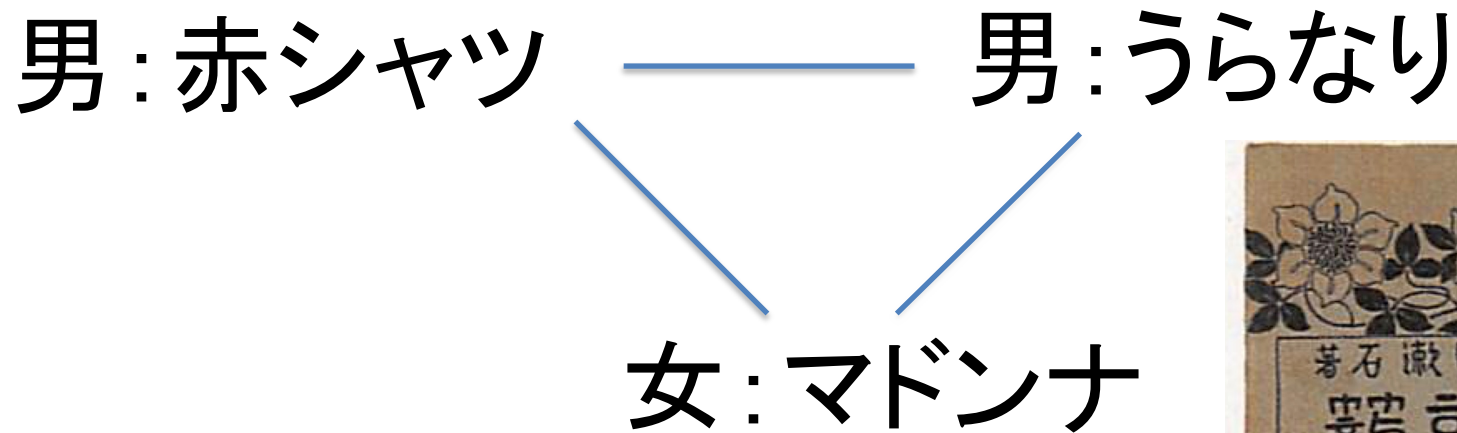
吾輩は猫である



^{わがはい}
吾輩は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたかとんと見当がつかぬ。^{けんとう}何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩はここで始めて人間というのを見た。しかもあとで聞くとそれは書生という人間中で一番^{どうあく}獰悪な種族であったそうだ。この書生というのとは時々我々を捕^{つかま}えて煮て食うという話である。しかしその当時は何という考もなかったから別段恐いとも思わなかった。ただ彼の^{てのひら}掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じがあったばかりである。掌の上で少し落ちついて書生の顔を見たのがいわゆる人間というものの^{みはじめ}見始であろう。この時妙なものだと思った感じが今でも残っている。第一毛をもって装飾されべきはずの顔がつるつるしてまるで^{やかん}薬缶だ。その後猫にも^あだいぶ逢ったがこんな^{かたわ}片輪には一度も^{でく}出会わした事がない。のみならず顔の真中があまりに突起している。そうしてその穴の中から時々^{けむり}ぷうぷうと煙を吹く。どうも^む咽せぼくて^{たばこ}実に弱った。これが人間の飲^{たばこ}む煙草というものである事はようやくこの頃知った。

漱石的三角形『坊ちゃん』



『鴉籠』(「坊っちゃん」「二百十日」「草枕」収録) 明治40年1月1日発行 春陽堂刊 [装幀:橋口五葉]

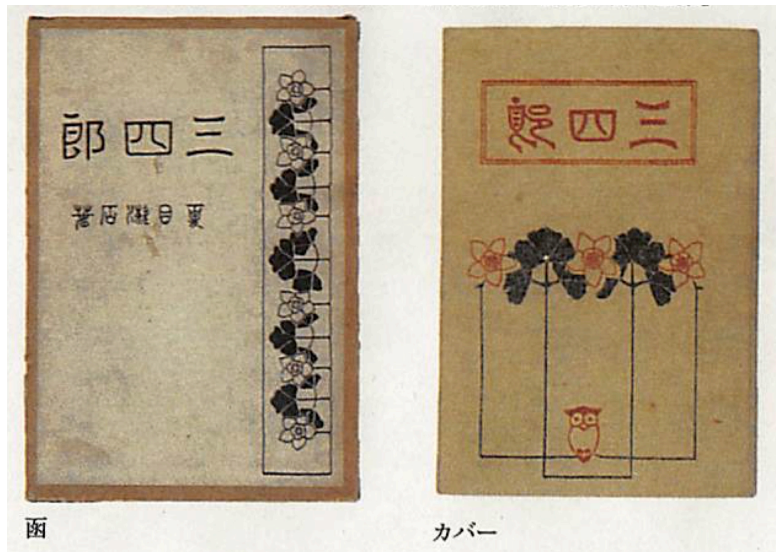
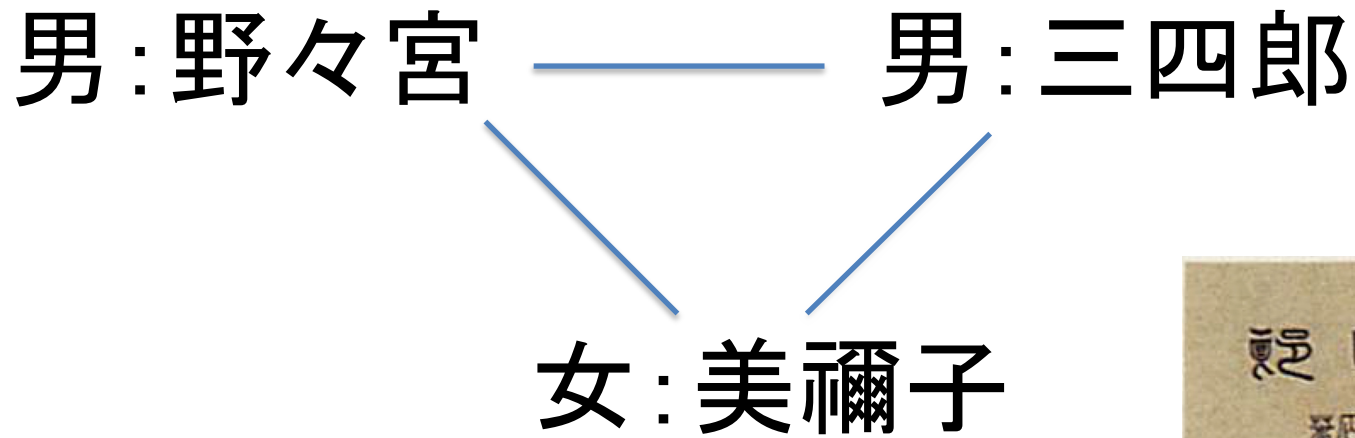
漱石的三角形『虞美人草』

男：宗近 ——— 男：小野

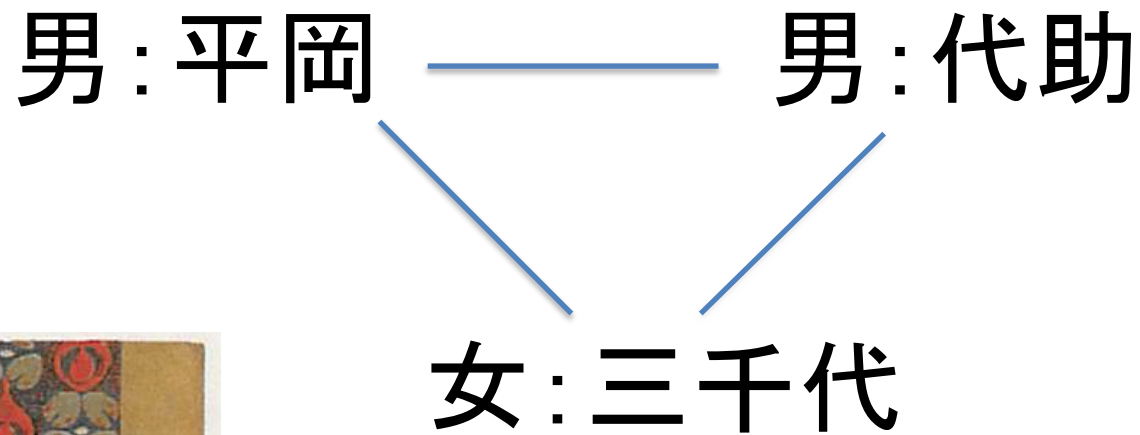
女：藤尾



漱石の三角形『三四郎』



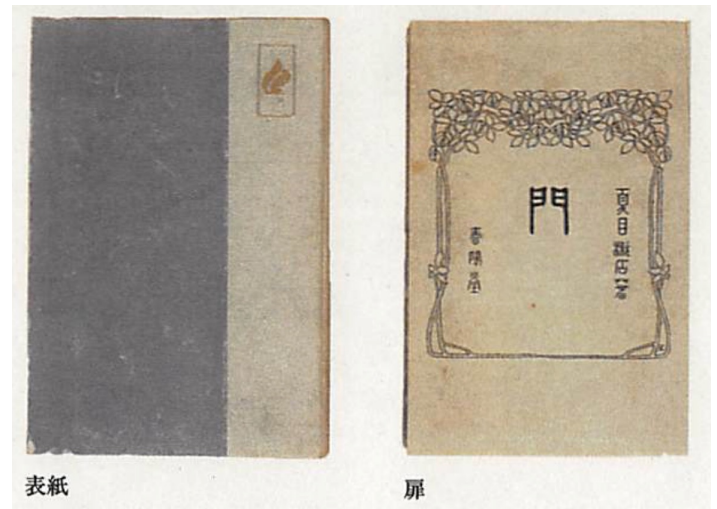
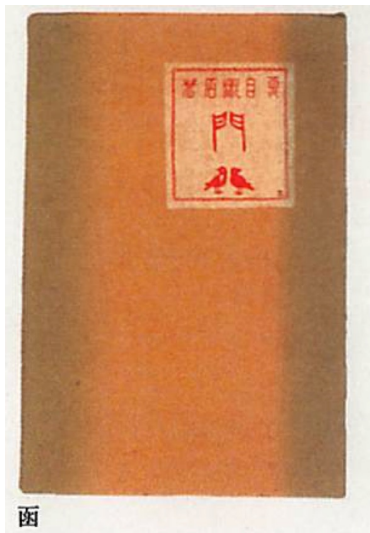
漱石的三角形『それから』



漱石の三角形『門』

男：安井 ——— 男：宗助

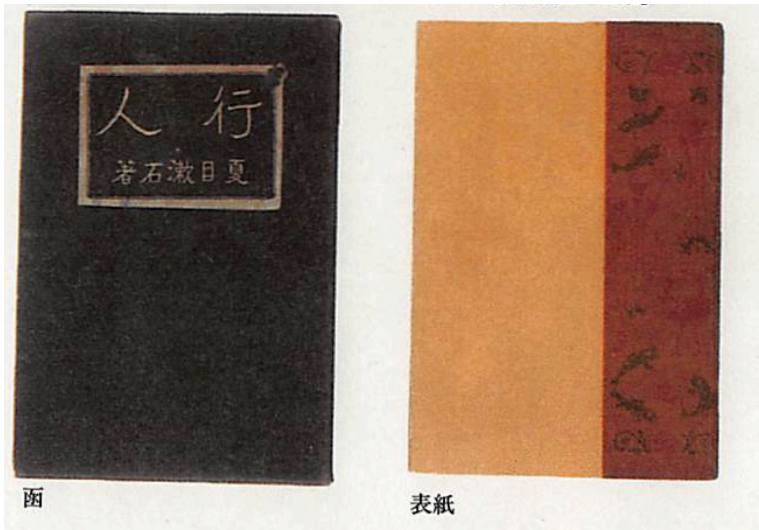
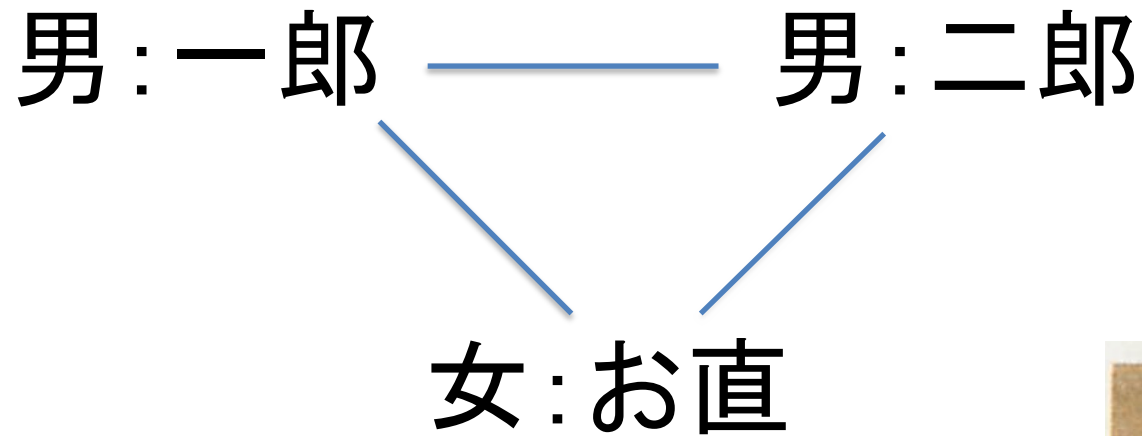
女：お米



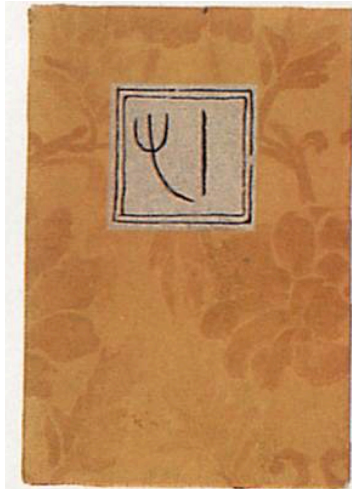
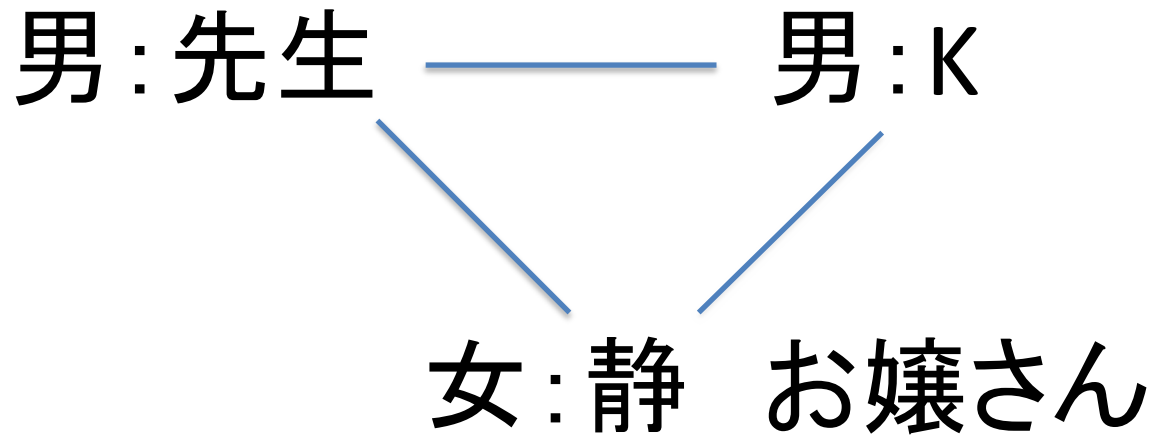
表紙

扉

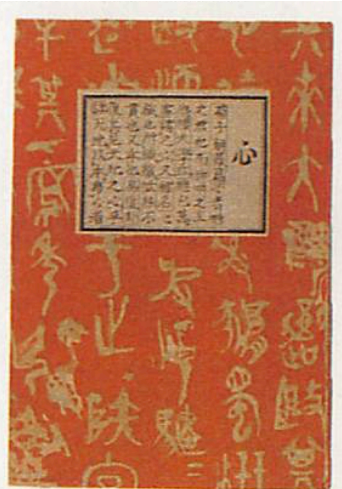
漱石の三角形『行人』



漱石的三角形『こころ』



函

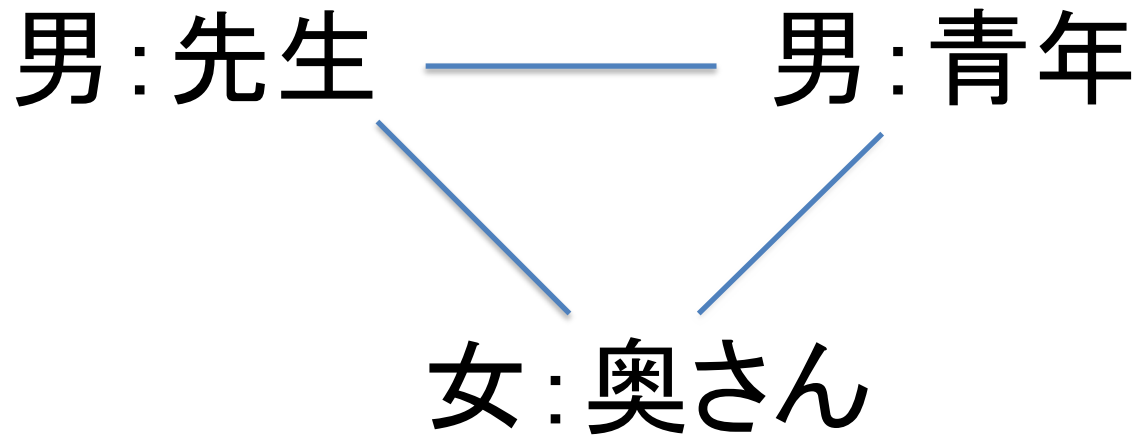


表紙



扉

漱石的三角形『こころ』



恋に上る階段なんです。異性と抱き合う順序として、まず同性の私の所へ動いて来たのです

上13

こころ論争

小森 陽一「『こころ』を生成する「心臓(ハート)」『成城国文学』(1), 41-52, 1985-03

石原 千秋「『こころ』のオイディプス：反転する語り」『成城国文学』(1), 29-40, 1985-03

三好 行雄「ワトソンは背信者か--『こころ』再説」『文学』56(5), p7-21, 1988-05

漱石の三角形『明暗』

男：関

男：津田

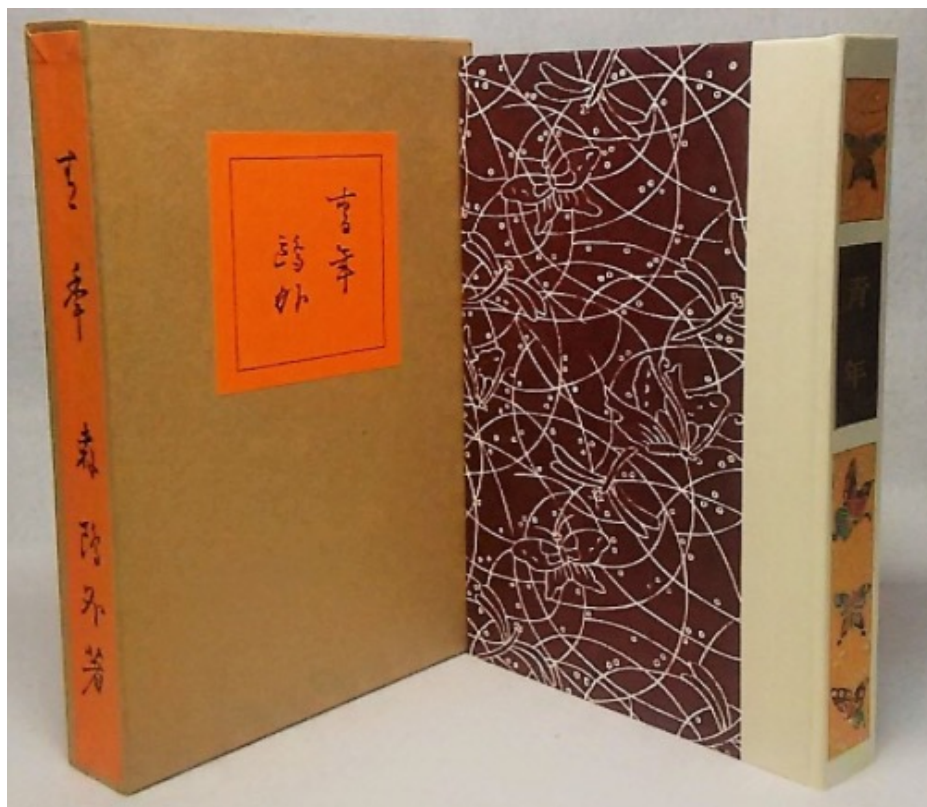
女：清子

女：お延

女：吉川夫人
お秀



森鷗外『青年』 靱山書店 大正2年刊



「金井君も何か書いて見たいという考はおりおり起る。哲学は職業ではあるが、自己の哲学を建設しようなどとは思わないから、哲学を書く気はない。それよりは小説か脚本かを書いて見たいと思う。しかし例の芸術品に対する要求が高い為めに、容易に取り付けないのである。そのうちに夏目金之助君が小説を書き出した。金井君は非常な興味を以て読んだ。そして技癢を感じた。」

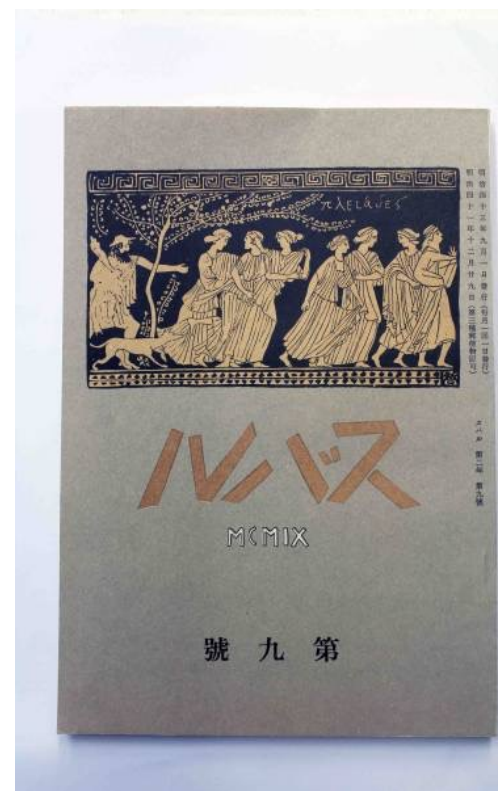
森鷗外「キタ・セクスアリス」『スバル』1909(M42).7

「三四郎」

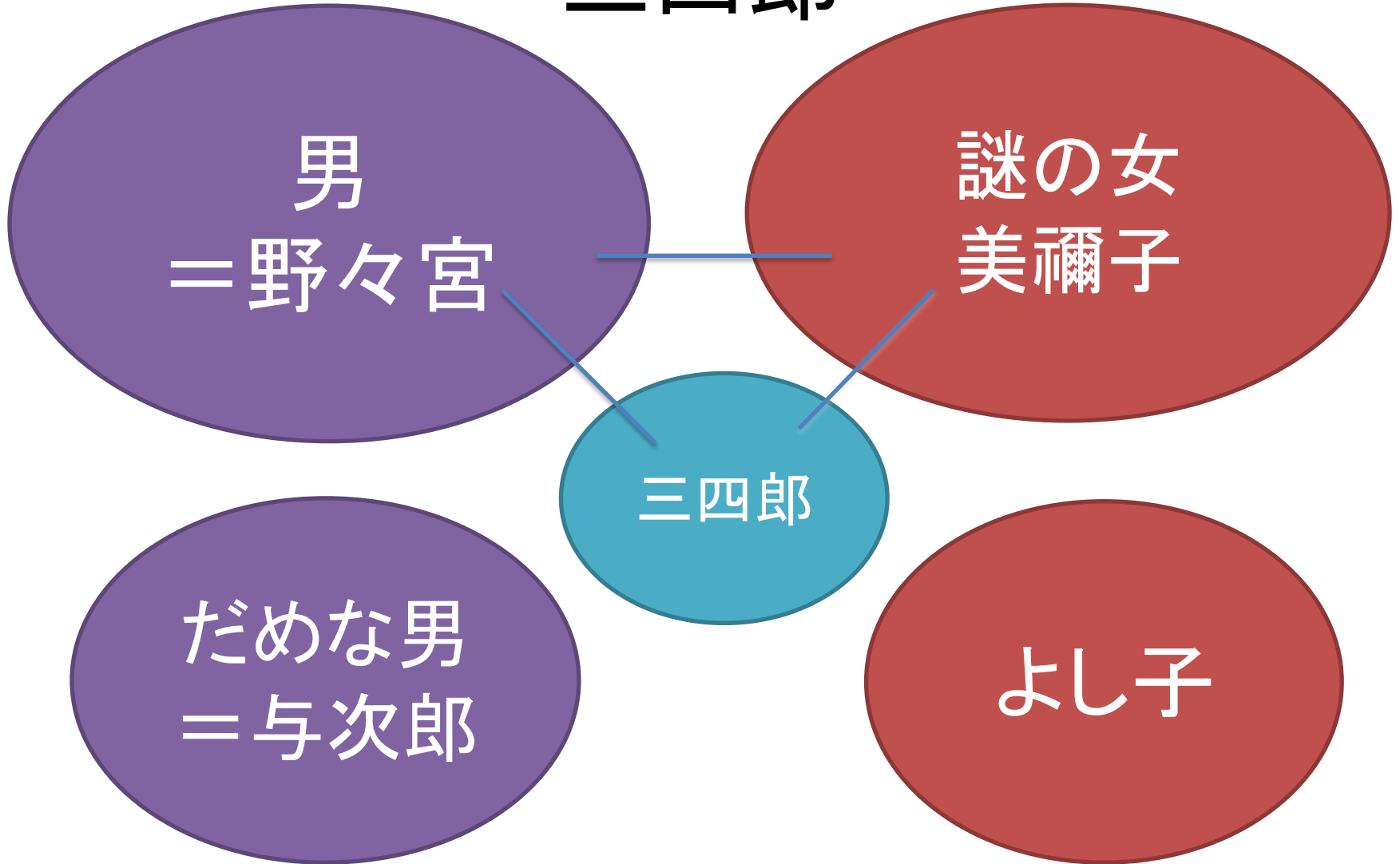
『朝日新聞』1909(M42).9.1～12.29

「青年」

『スバル』 1910(M43).3-1911.8



三四郎



青年

男
= 大村

謎の女
= 坂井夫人

純一

だめな男
= 瀬戸

お雪さん

『青年』十

- 予期していなかったのはそればかりではない。己が知る人になるのに、こんな機縁で知る人になろうとも予期していなかった。己は必ず恋愛を待って、始めて知る人になろうとも思わなかったが、又恋愛というもののなしに、自衛心が容易に打ち勝たれてしまおうとも思わなかった。そしてあの坂井夫人は決して決して己の恋愛の対象ではないのである。

『青年』十八

- しかし恋愛はしない。恋愛というものをいつかはしよう、負債のように思っただけで、恋愛はしない。思慮の冷かなのも、そのせいだろうかなどと考えて見る。

『青年』十一

純一は先きへ下駄を引っ掛けて、植木屋の裏口を覗いて、午食をことわって置いて、大村と一しょに歩き出した。大村と並んで歩くと、動もすればこの巖乗な大男に圧倒せられるような感じのするのを禁じ得ない。

純一を感じが伝わりでもしたように、大村は一寸純一の顔を見て云った。

「ゆっくり行こうね」

なんだか譲歩するような、庇護するような口調であった。しかし純一は不平には思わなかった。

『青年』二十一

- 純一の笑う顔を見る度に、なんと云う可哀い目付きをする男だろうと、大村は思う。それと同時に、この時ふと同性の愛ということが頭に浮んだ。人の心には底の知れない暗黒の堺がある。不断一段自分より上のものにばかり交るのを喜んでいる自分が、ふいとこの青年に逢ってから、余所の交を疎んじて、ここへばかり来る。不断講釈めいた談話を尤も嫌って、そう云う談話の聞き手を求めることは屑としない自分が、この青年の為めには饒舌して忌むことを知らない。自分は homosexual ではない積りだが、尋常の人間にも、心のどこかにそんな萌芽が潜んでいるのではあるまいかということが、一寸頭に浮んだ。

まとめ

- 自然主義の時代
- 文学の位置の変化
- 文体の確立
- 作家自身を書く文学の発生
- 自然主義／漱石／鷗外
- 虚構としての強度